

## 中学校授業実演

### 「音声から文字へ」「ダイアログからモノログへ」

発表者：豊後大野市立犬飼中学校 首藤 康章（授業実演者）

指導助言者：大分県教育委員会 義務教育課

義務教育指導班指導主事兼課長補佐 小田雅章

上記の2本柱を軸に組み立てたのが今回の授業です。どちらも人類の言語獲得順序・ことばの歴史であると同時に、「聴き話す」→「読み書き」という脳進化の筋道にも合致しているからです。授業でこの2本柱を具現化することが、私の提起になると考えました。

大きなパーツは3つ。①いくつかのダイアログを繋げた英会話活動 ②音読活動 ③音声でのやりとりによる「報告(レポーティング)」活動、です。メイン活動を③にしました。ただし、あらかじめ質問原稿を用意するのではなく、「何も見ずに」やりとりを行う、というのが本授業③の主眼です。即興性へのトライとも言えます。

文部科学省は「話す」活動を2つに分けました。準備した文を音声発信する「スピーチ(モノログ)」、その場での即興的なやりとりを行う「やりとり(ダイアログ)」。2020年東京オリンピックを目途に、従来の英語教育に足りない即興性を重視したからでしょう。私もその方針には大いに賛成です。本校では帯活動として、授業開始後数分間、やりとり系の活動を入れています。

「How are you ?」「I'm fine.」のように、2文で完結するのではなく、「Do you like cats ?」「Yes, I do.」,「What kind of cats do you like ?」「I like Mike」,「Do you have any cats?」「No, I don't.」--のように、それが①です。50分間以内にできるだけ多くの英語を発話させる上でも、幾つかのダイアログを組み合わせることが重要でしょう。

なぜダイアログか？そう思ったエピソードがあります。2008年、2009年と2年連続で、私は冬期休業中、中国の上海に視察旅行しました。視察先は「上海実験校」です。日本で言うと大学の附属小中学校に当たります。グローバル化が進んでいる中国の先進的英語教育を見たかったのです。まず小学校3年生の授業を見ました。無論授業はオールイングリッシュ。基本はダイアログ指導でした。日本では中2で教える不定詞や中3に教える現在完了形などを使って、何のてらいもなく小3が会話をしています。「読み書き」が入るのは小学校高学年から。頭に音声がつぶり入っているので「読み書き」がぐんと楽になるそうです。1単位時間における英語の発話量が、日本とは比べものになりません。次に中2の英語の授業。問題を解いていました。内容はなんと英語検定準2級レベル。この子らが成長し、同年代の日本の生徒と将来ビジネスで渡り合うとしたら、日本の生徒はとても勝てないと肌で感じました。音声の蓄積が違いすぎるのです。勉強になりました。

さて、当日の模様をレポートします。会場に向かう朝のバスの中、数人の生徒から以下の声が出ました。「先生、気持ち悪いです」「具合が良くないです」。バス乗車前には明るい雰囲気だった生徒達も、やはり知らない会場、慣れない雰囲気という非日常を目の前にして、急に不安が湧き出たのでしょう。同乗した本校校長が緊張を解きほぐす指導をしていただきましたが、授業20分前、まだ幾分硬い表情が残っています。私の最初の仕事は、生徒を日常に戻すこと。早速授業前には随分前に学習した教科書ページを音読。さながら合唱コンクール直前のように、とにかく「誰にでもできる」活動で声を出させました。「体育館前に来てください」の指示の下、移動。体育館に入場する頃には、かなり緊張の糸が解けていよう、今度は逆に私語が増え、注意されるはめに。着席した直後に放った第一声は「スクリーンがでかい!」「普段教室に貼るインスタ

ントスクリーンは見にくい時があるもん」。なるほど、確かに見やすい。ある意味、絶好の環境でした。

さて、授業開始のチャイム。普段の授業どおり、会話活動から入りました。一つのダイアログで終わるのではなく、3～4つのダイアログを組み合わせ、英語の神経回路を作る。相手を変えることで、同じダイアログを複数回練習できます。今回は2種類のダイアログを使いました。授業後に「練習のテンポが速過ぎるのではないか？」というコメントをいただきました。私は、小脳のスキルである英会話に関しては、ある程度テンポを上げ、間を空けない方がいいと考えています。さながら「かけ算九九」のように、無意識に英文が出てくる状態が理想的と思うからです。例えば「Hello.」と声をかけられたとき、「(ええっと、Hello はこんにちは、という意味だから、こちらと同じ言い方で返せばいいんだっけ) Hello.」などと考えたりしませんよね。それと同じで、無意識にかつ反射的にその場に合う英文を引き出す上では、必ずしも「丁寧にゆっくり」は逆効果の気がします。

次に復習音読です。③をスムーズに行う布石として入れました。この復習音読は「③に繋がる活動として入れたらどうか」という福田先生のアドバイスに従って挿入しました。このパーツは2段階に分けています。前半に教科書の絵を見ながらの音読。後半に教科書の文字を見ながらの音読です。つまり、前半は場面と音を結びつけ、後半は音と文字をリンクさせるというそれぞれ別の目的があります。私の在籍している豊後大野市はデジタル教科書が配布されているので、日常はそれを使っています。デジタル教科書を使えば、様々な機材を移動する手間が省けるので確かに便利ではあるのですが、ピクチャーカードを使っているアナログ的音読練習も、生徒の理解スピードに合わせた指導ができ、効果的だと思います。He knows every street there.の文でやや声が小さくなったのは私の指導不足です。

そして、報告活動。「自分のペアの好みを別に人に伝える」という単純な活動です。まず自分のペアとお互い「What animal do you like ?」「I like dogs.」のように尋ね合います。その後、別の人と「What animal does he (she) like ?」「He likes cats.」というやりとりを行うのです。使用するワークシートには、あえて文字は一切使っていません。「What animal does she like ?が言えるのか？」と不安視する声もありました。しかし、文字を使うと、生徒は「正確性」に神経が集中し、「流暢性」を鍛えるチャンスを逸してしまいます。最終ゴールを「即興のやりとり」に置くからには、多少のエラーは大目に見て発話量を増やす方向性を重視したかったのです。エラーは後に修正してやればいいわけで(focus on form)、今回は文字を使わない空中戦にしました。復習音読や口頭練習をたっぷりやれた上、生徒の頑張りもあり、思ったよりテンポ良く進んだようです。最後は自分の作った紹介文をペアで読み合う→英文を書く→自分の意見を1つ加える。英文を書けた生徒から、私にノートを見せに来るようにしました。三単現のsを落としている生徒はいませんでした。He likes dog.のように、likes の後の名詞を単数形にしていたり、Iを小文字にしていた間違いがありました。

授業後、いろんな感想・質問・意見をいただきました。ありがたく拝察し、これからの指導に活かしていきます。稚拙な授業でしたが、参観していただいた皆さんに少しでも与えるものがあったら嬉しいです。末筆になりますが、今回の授業に当たり、小田指導主事や福田先生・小倉先生らには指導案検討や授業準備等で大変お世話になりました。豊後大野市の先生方からも、事前授業などのサポートをいただきました。参観していただいた先生方へも含めて、お礼申し上げます。ありがとうございました。